

聖書：士師記15章1～8節

説教：復讐はわたしのもの

はじめに

主の使いによって「イスラエルを救い始める」と言われたサムソンでしたが、大きくなるとんでもない乱暴者になってしまいます。サムソンがペリシテ人の女性と結婚するために披露宴の席についた時のことでした。当時の習慣として、サムソンは謎かけゲームをしようとペリシテ人に提案する。ところが、謎を解くことができないペリシテ人は、サムソンの妻を呼び出し、お前の夫から秘密を聞き出さないと家に火をつけるぞと脅迫する。そのことを知ったサムソンは、腹を立てて家に帰ってしまった。それが前回までもあらすじです。その後で起きたことが今日の箇所書に書かれています。読んでおわかりのとおり、どんどん悪い方向に向かっていく。ここにどのような恵みがあるのかを考えてまいります。

1 復讐その1

1) 妻が奪われた

腹を立てて家に帰ってしまったサムソンでしたが、やがて気を取り直し、お土産に子山羊一匹をもってしゅうとの家を訪ね、妻に会わせてほしいと願います。ところがしゅうとは意外なことを言う。2節。「私は、あなたがあの娘を嫌ったのだと思って、あなたの客の一人に与えた。妹のほうがいいではないか。あれの代わりに妹をあなたのものにしてくれ。」これだけ読めば、ふびんに思った父親が娘に恥をかかせないように、別の男に嫁がせたのだろう。父親は悪くないと思うかもしれない。

2) 害を加えても私は潔白だ

ところがサムソンはこう言い返す。3節。「今度、私がペリシテ人に害を加えても、私は潔白だ。」サムソンは自分が悪いことをしたとは思っていない。むしろ自分は大変な恥をかいたのだから、復讐する権利があると主張し、実際、ジャッカル三百匹をつかまえ、ジャッカルの尾に火をつけてペリシテ人の畑に放って大損害を与えてしまいます。いったいどちらの言い分が正しいのでしょうか。

2 復讐その2

1) 妻が殺された

そのことは、次のペリシテ人のことばから読み解くことができます。6節。「『だれがこんなことをしたのか。』すると彼らは『あのティムナ人の婿サムソンだ。あの人が彼の妻を取り上げて、客の一人にやったからだ』と言った。ペリシテ人は上って来て、彼女とその父を火で焼いた。」畑を火で焼かれて大損害を被ったペリシテ人たちは、すぐにサムソンのしわざであることを突き止めます。ところがサムソンを捕まえようとしない。サムソンがなぜあんなことをしたのか、その動機が問題になったからです。ティムナ人と呼ばれる父親が、サムソンに断りもなく、勝手に妻を取り上げて客の一人にやった。ペリシテ人の目から見ても、これは本当にひどいことだ。サムソンが怒るのは当然、悪いのはティムナ人の父親である。そう判断したペリシテ人は、ティムナ人の父親の家に向かい、父と娘を火で焼いてしまいます。

2) 必ず復讐する

このことを知ったサムソンはどうか。7節。「おまえたちがこういうことをするなら、私は必ずおまえたちに復讐する。その後で、私は手を引こう。」妻を殺された仕返しとして、ペリシテ人に必ず復讐すると誓い、ひどい損害を与えます。ここまで問題が大きくなってくると、ペリシテ人も黙っていない。今度はペリシテ人がサムソンに復讐を企てる。それでサムソンは、エタムの岩の裂け目に逃れた。それが今日の場面です。

3 神

1) 人の罪：復讐の連鎖

ここまでのことを整理します。妻を奪われたサムソンは、自分は潔白であると主張し、ペリシテ人の畑に火を放って復讐しました。そして次に、自分の妻が焼き殺されたことを知ると、ペリシテ人の足腰を打って再び復讐します。今の時代なら、このようなケースは、裁判所に訴えろとか、警察が刑事事件として捜査し、国家の法律の下で犯人を裁くことになります。ところがここには警察も裁判所も出て来ない。サムソンが自分の目に正しいと思うことを、自分の手でやっています。いまから三千年以上も前の中東に住むちっぽけなイスラエル民族です。人権という考えもなかった野蛮な時代なので、

法律や裁判所という制度もなかったのだろう。そんなふうに想像するでしょう。

2) 律法

しかしサムソンの時代、すでにいまの法律と同じような役割を持つ「律法」と呼ばれるシステムがイスラエルの中にありました。もっとも有名なのが、モーセの十戒と呼ばれるもので、そのなかにある「殺してはならない」「盗んではならない」「偽りの証言をしてはならない」というところは今の法律とまったく同じです。モーセの時代はモーセ自身が裁判長になってこれを守らせる。しかし百年、二百年と時間が経つに従い、だんだん律法は忘れられていきます。サムソンは律法を守らないということにかけては、イスラエルの代表選手と言ってもいいくらいで、彼は何をするにも神に何うことはないし、祈ることもしない。この後で祈る場面が出てきますが、それは困ったときの神頼み、というような実に薄っぺらい祈りです。

それでもかなり好意的な見方をすると、サムソンは何にも縛られない自由さがあって、人間にとって理想的な生き方だと言う人もいるかもしれない。しかし何にも縛られないという「自由」が本当に人間を幸せにするのでしょうか。サムソンのやることなすことが、逆に問題を複雑にし、混乱させ、しゅうとも妻も死ななければならなくなりました。とても幸せとは思えません。

少し前のテレビドラマで流行ったセリフに、「やられたらやり返す。倍返しだ」というのがありました。あくまでもドラマの話しですから笑って済ませられる。しかし現実はそのものではありません。あの人に裏切られた、あの人にだまされて人生をめちゃくちゃにされた。それなのに相手はのうのうと暮らしている。復讐してやりたい。そんな思いを抱えている方がたくさんいます。サムソンにしてみれば、悪いのはペリシテ人だ。自分にはきちんとした理由があって復讐した、と言うでしょう。

3) 復讐は神がすることである（申命記32章35節）

しかし神は復讐に関して、一つの律法を与えておられました。申命記32章35節。「復讐と報復はわたしのもの。」パウロもこれを取り上げて、こう言っている。「愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。」（ローマ書12章19節）

聖書でいう復讐には、二つの側面があります。一つ目は、間違った者がさばかれることです。二つ目は、正しい者がもういちど名誉を回復して元に戻されること、失った者、いのちを取り戻すことまでを含みます。なぜ私たちは、復讐してはいけないのでしょうか。今日の所を見てください。ムソンは自分の妻を奪われて怒り、復讐しようとしてしました。それは自然な感情であって、決して間違ったことではない。しかし、そこには罫もあるのです。サムソンのことを見てもわかるように、怒りにまかせて人の手で復讐してしまえば、また別の復讐を引き起こしてしまう。結局多くの人たちが傷つくだけで、どこにも解決がない。亡くなった妻は帰ってきません。

どうしたら良いのでしょうか。聖書は、復讐を神にゆだねなさいと言います。それでも疑うでしょうか。神は、本当に正しくさばきを行い、復讐してくださるのか。手遅れということはないのか。神が悪い者に対して復讐してくださるのはよいとしても、サムソンのように殺された妻を取り戻すことができなかったなら、結局被害者は泣き寝入りするしかないのではないか。

4) イエス・キリスト

そんなことはありません。神がなさる復讐は完全です。イエス・キリストの十字架がそれです。復讐には二つの意味があると言いました。私たちは、罪の裁きとして神から復讐を受けるべき存在でした。ところが、神のひとり子である方が、私たちの身代わりとなって復讐を受け、十字架で死なれました。そもそものが、私たちが神から復讐を受けるべき者だったことを忘れてはなりません。それが一つ目の意味です。

二つ目。復讐には回復と言うことも含まれると言いました。十字架はどうでしょうか。この方は三日目に死からよみがえりました。サムソンは敵に復讐しても自分の妻を取り戻すことができません。しかし神は違う。完全に取り戻して、私たちに返してください。だから、復讐を神にゆだねなさいと言ってくれる。

望みがない者であったのに、十字架を通してすべてを回復してくださる神を通して、朽ちることのない望みを与えてくださったことに感謝します。